

# 1999年国際図書館連盟 (International Federation of Library Associations and Institutions: IFLA) バンコク大会レポート

高 島 涼 子

まえがき

## 1. IFLA バンコク大会レポート

### 1. 1 タイの図書館事情

### 1. 2 多文化社会サービスセクション常任委員会

### 1. 3 学校図書館訪問

### 1. 4 Library Services to Multicultural Populations joint with Management and Marketing

## 2. 多文化社会サービス

まえがき

1999年8月20日から28日までタイのバンコクでIFLA大会が開催された。この組織は1927年に設立された国際的な民間組織で、UNESCOの公的な協力機関である。153カ国から1700の会員(各国の図書館協会、研究所他)が参加している。現在の会長は1998年までの会長、Robert Wedgeworthの後を引き継いだフランスのChristine Dechampsである。35のセクション、10のラウンドテーブルがあり、事務局はオランダのハーグに置かれている。図書館界における世界的な問題、たとえば酸性紙による資料保存の問題、情報記述の国際的な標準化の問題、情報検索におけるアクセス権、移民や難民などの母国を離れて生活している人々や先住民族への資料提供の問題等に取り組み、1年に1回、世界各地で大会を開き、諸問題についてセクションを設け、討議を重ねている。

1999年、筆者はセクションの一つである多文化社会サービス (Library Services to Multicultural Populations) の委員に選出された。これまで東京大会(1986年)、北京大会(1996年)、コペンハーゲン大会(1997年)に出席してきたが、委員として出席するのは1999年バンコク大会が初めてである。バンコク大会の様子をレポートする。

## 1. IFLA バンコク大会レポート

IFLA バンコク大会の参加者は、2,237名、参加者の国は117カ国であった。100名を超える参加者があったのは、U.S.A., タイ、ロシア、フランスで、日本からの参加者は約40名であった。

### 1.1 タイの図書館事情

タイは王国であり、1939年までは国名をシャムとしていた。人口は約6,120万人、そのうちの

高 島 涼 子

10%が首都バンコクに集中している。公用語はタイ語で、国民の大半が仏教徒である。図書館は主要な情報提供源としての役割を担うよう期待されている。

タイ図書館協会 (Thai Library Association: TLA)

タイ図書館協会は1954年に設立され、1961年に IFLA に、1978年に東南アジア図書館会議に加盟している。

学術図書館、学校図書館、専門図書館、公共図書館、国立図書館等各館種ごとのグループに分かれ、活発に活動している。

図書館学教育

タイにおける司書養成は、19世紀以降、デンマーク、イギリス、フランスから司書を招き、またチュラロンコン大学図書館司書を留学させて行われてきたが、1955年、同大に司書養成のための大学院が設立されたことにより、タイ国内での養成が可能になった。現在では、14の大学と教員養成校である Rajabhat Institutes で学部における司書養成課程があり、9大学で図書館学の修士課程がある。現職の司書の研修にはタイ図書館協会が責任を負っている。

学校図書館

タイの教育制度は、初等義務教育が6年間、中等教育が6年間となっている。

1961年6月1日に最初の学校図書館が業務を開始したので、現在では6月1日を「学校図書館の日」School Library Day としている。

学校図書館の発展は鈍いものであったが、1962年、教育省 Ministry of Education が初等中等学校図書館の基準を作成し、改善委員会を設置してから画期的な発展を遂げた。この最低基準の設置と、タイ図書館協会との協力による優良学校図書館および司書の表彰も学校図書館の発展に貢献している。

しかし、まだまだ蔵書は貧しく、職員の大多数は資格を有していない。

公共図書館

タイの公共図書館の前身は、「公共読書室」public reading room である。学校の施設を使って1916年に設置された。1950年の図書館数は64であった。

公共図書館は3種類に分けられる。県立 (provincial)、郡立 (district)、区立 (sub-district) および移動図書館である。公共図書館の機能は次の6点である。

1. 一般民衆に非正規教育 (non-formal education) の機会を提供する。
2. 読書・学習習慣を奨励する。
3. 最新の情報と知識を提供する。
4. 民主主義に対する健全な態度を育成し市民の意識を覚醒させるために人々にアドバイス

と知識を与える。

5. 文化の向上に寄与する。

6. 人々に余暇の有効な使い方を奨励し、アドバイスを与える。

県立図書館は図書の提供や視聴覚資料の提供、非正規教育関係の業務以外にも、通信教育や遠距離教育課程のある大学のための資料や教科書を所蔵、提供の業務も行っている。

県立に次いで中規模図書館として、シリンドーン王女(H. R. H. Princess Maha Chakri Sirindhorn)の名を冠した Chalmrajgumaree 図書館が全国で76館ある。王女は教育を奨励し、また自らも著作をされる学者でもいられる。IFLA バンコク大会でもタイ図書館協会後援者(patron)として開会式でスピーチをされ、また一般参加者と同じ参加手続きを取られて、いくつかのセッションに出席されている。

小規模図書館としては、郡立(district)と区立(sub-district)がある。現在655の郡立図書館と53の区立図書館がある。1999年1月からは水上移動図書館(Mobile-Floating Library)がサービスを開始している。運河や川沿いに暮らす人々に資料提供し、また水資源保全に参加していくプログラムが実施されている。

公共図書館はさらに、最近の社会問題であるドラッグ、家族、環境保全、職業教育などにも焦点を当てたサービスを行っている。都市住民、労働者、社会的に恵まれない人々、学校に行っていない児童、教育の機会を奪われた人々を特に対象としたアウトリーチ・プログラムが実施されている。

タイでは人口の85%が農村に居住しており、貧困、健康、識字が大きな問題となっている。こうした問題に対して、公共図書館は全ての年代の人々にとって重要な知的資源であり学習センターであると考えられている。図書館は学習の機会を常時提供している機関である。(1)

## 1.2 多文化社会サービスセクション常任委員会

今大会出席の主目的である多文化社会サービスセクション常任委員会第1回会議は8月21日正午から開催された。議長と書記を選出後、以下の点を討議、決定した。

\*リーフレットの改訂

\*IFLANETの有効利用

\*2000-2001年の行動計画

第2回会議は8月27日8:30より開催され、主に2000年エルサレム大会について議論が交わされた。2000年は多文化サービスセクション設立20周年の年に当たるので、特別プログラムが計画され、またプレカンファランスも行われるからである。特別プログラムに関しては前議長で多文化サービスに多大な業績をつんできたマリー・ゼリンスカを中心に企画が立案されることを決定した。

プレカンファランスの開催場所については意見が二分され、決定には至らなかった。エルサレム大会ではヨルダンとエジプト以外のアラブ諸国からの参加は見込めず、アラブの人々のために

高 島 涼 子

ブレカンファランスの場所をヨルダンもしくはエジプトで開催すべきという意見と、多文化サービスはアラブ諸国では行われてはおらず、イスラエルこそ多文化サービスの問題を抱えているのであるからイスラエルで開催すべきという意見が出された。また参加者の安全の問題も討議された。

大会の初めと終わりに開かれる会議に出席して、改めて多文化サービスの意義と困難さを感じさせられた。日本の社会の安全さと平和を感謝すると同時にそうした社会に暮らすものの責務を日本の図書館界に知らせる義務を負っていることを思わされた。

### 1.3 学校図書館訪問

1999年8月25日、Mattayom Wat Dusitaram School を訪問した。この学校は中等教育を行っており、生徒数は2000名、年齢は13歳から18歳、教職員数は130ということであった。図書館は1万5千冊の蔵書、850のビデオ・カセット、260のテープ、120CD-ROM、45種類の雑誌、新聞11紙を所蔵している。一日の平均来館者は1100名、貸出冊数は350-400冊である。職員は、司書が1名、職員（officer）が1名、アシスタントが2名でこれに学生のスタッフが1名加わる。うち司書と職員が専任職員である。座席数は約200席で、開館時間は6:15-16:00となっている。貸出はコンピュータで生徒自身によって手続きがなされる方法を取っている。予算は年間20万バーツで日本円では約60万円となるが、タイの物価を考えると実質的には60万円よりはるかに多いといえる。

同校は1985年に中等学校に移行後（それ以前は初等学校で1976年に創立されている）、図書館の整備にも力を注ぎ、コンピュータ施設、視聴覚資料を充実させ、雑誌やヤング・アダルト向け図書、小説などを収集してきた。また、古書や貨幣の収集にも努めてきた。

筆者たちが訪れると、生徒たちが列を作って迎えてくれ、校長室に案内された。学校紹介のビデオを見せてくださり、その後図書室を見学した。途中屋外で風がよくとおる場所が閲覧スペースとして利用されており、暑い国の知恵をみせられた。日本の教室の1.5倍くらいの広さの閲覧室とコンピュータ・ルームを生徒さんが案内してくれた。国王と王妃のコーナー、シリンドーン王女のコーナーがあり、それぞれ写真と著作や絵画などが展示されていた。各コーナーには説明役の生徒さんがいて一生懸命覚えたと思われる英語で説明してくれたのには感動した。

その後ホールに移り、タイの伝統楽器の演奏と伝統舞踊や伝統手法による絵画を間近に見せていただき、また、生徒さんたち手作りのタイの食べ物を作り立てのアツアツでいただき、味わうことができた。タイはホスピタリティーの国といわれているが、この学校図書館訪問とその数日前に招待された学校図書館訪問者のためのレセプションで実際にそれを体験することができた。この準備のために費やされた時間と手間とそして何よりも暖かく歓迎して下さった親切に深く心を動かされた図書館訪問であった。

#### 1.4 Open Session of Library Services to Multicultural Populations joint with Management and Marketing

多文化社会サービスセクションとマネジメントのセクションが合同で持ったオープンセッションが8月24日、9:00から11:20まで行われた。テーマは“Managing Diversities with Multicultural Users and Different Staff”であった。発表タイトルと発表者は以下の通りである。

1. To reach multicultural users in libraries: some reflections and examples from Sweden  
MAUD EKMAN (Eskilstuna County Library, Eskilstuna, Sweden)
2. Managing multicultural staff in a South African university library  
HEATHER M. EDWARDS (University of the Witswatersrand Libraries, Johannesburg, South Africa)
3. Leitung von Bibliotheksmitarbeitern mit unterschiedlichem kulturellen Hintergrund: der Ost-West Konflikt in Berlin (Managing library staff from a different cultural background-the East-West conflict in Berlin)  
CLAUDIA LUX (Berlin Central and Regional Library, Berlin, Germany)
4. A New Zealand perspective on managing cultural diversity  
JOHN H. MOHI (National Library of New Zealand, Wellington, New Zealand)

このうち1.と4.について概略を述べる。多文化サービスや文化の多様性 (diversity) について考えるなら、民主主義や人権について、また社会の基本的なありようについて触れざるを得ない。特にこれらについて述べていると思われるので、この2点を紹介したい。

“To reach multicultural users in libraries: some reflections and examples from Sweden”は多文化サービスの活発な国の一つであるスウェーデンからの実践報告である。以下に内容を述べる。

情報と知識の獲得は、そのサービスの差がますますひらいていく今日、非常に重要な権利となっている。そうした状況にあって図書館は民主主義と平等の土台を社会の中で築いていくものである。1979年の図書館法改訂以後、複数言語資料の提供が通常業務の一部として行われている。スウェーデン図書館協会発行の『世界の中心の図書館』(*The Library at the Centre of the World*) にこの多文化サービスについて詳しく書かれている。

スウェーデンでは人口の1割がスウェーデン以外のバックグラウンドを持っており、特に中心都市であるストックホルム、ゴセンバーグ (Gothenburg)、マルメでは人口の50%が外国人である。また難民も国内に多く住んでいる。こうした人々にサービスする図書館は、何よりも資料を提供し、暖かい環境を提供すべきである。中央図書館はもちろん複数言語による豊富な資料提供を保障するという業務において重要であるが、住民に直接接する小規模図書館もまた、それぞれの地域に固有なニーズに応じていくという点で、特に子供や高齢者にとって、重要である事を忘れてはならない。また、いかなる年代の人々、いかなる言語を話す人々、いかなる宗教を信ずる人々もすべて歓迎される事を明確に知らせなければならない。

図書館を訪れるものは誰も、図書館が知識の大海であると同時にファンタジーの世界でも

高 島 涼 子

あることを、レジャーとして過ごす場所であると同時にインスピレーションを得る場所でもあるということを感じられるようにすべきである。無料で、気軽にいろいろな事を要求する事ができ、商業ベースにとらわれない、安寧な島である事が感じられなければならない。

図書館の利用に慣れていない人々に対しては、援助し、励まし、また秘められた可能性を引き出す事をしなければならない。その時に必要となるのは、資料組織や資料に関する知識は当然であるが、さらに人間そのものや社会や人類の英知についての知識なのである。

スウェーデンのマイノリティーで最も人口が多いのはフィンランド人である。音楽やカセット・ブック、ビデオといった活字資料以外の資料は、高齢者と二世、三世との両方にとって重要である。

マイノリティーの人々が話す言語の資料がなぜそれほど重要なのであろうか。彼らは速やかにその国の言語を習得すべきではないのか。その国の言語こそ社会に溶け込み、勉学や就職を可能にする鍵ではないのか。確かにそうではあるが、一方では、彼らの母語は彼ら自身の魂であり、感情であり、みずからの根元へ立ち返る鍵であり、母国の未来を共にする鍵であり、両親や祖父母や子供たちとのつながりとなる鍵でもあるのである。母語に通じているという事が新しい言語の習得の妨げとはならない。また、外国に暮らす高齢者にとっては、母語はすべての根源であり、新しい言語の習得は困難である。仮に流暢に新しい言語を使用できたとしても年を重ねる毎に母語しか使用できなくなっていく。図書館はこのことを心得ていなければならない。

サミ (Sami) の作家である Paulus Utsi は次のように書いている。

母語ほど深く人々の心に根ざしているものはない

思想を広げ

感性に広がりを与え

生きていく道をたやすくしてくれる

多文化サービスに近道はない。厳しい仕事であり、社会の中でまた民主主義形成において果たすべき、マイノリティー言語の回復といったものも含めて、図書館の役割というものがある。それゆえこうした図書館の仕事は誇り得るものである。

フィンランド人で幼少期にスウェーデンで過ごし、母語をいったん失った後習得した Antti Jalava はフィンランド語について次のように書いている。

フィンランド語は私の皮膚、私の空気、私の舞い落ちる雪、私の怒り、そして私の悲しみである。それは私の最も深い傷を癒し、最も深い感情を表現する言語である。フィンランド語はまさに私が私でいる源である。(2)

“ A New Zealand perspective on managing cultural diversity ”はマオリ語の魅力的な挨拶で始まりそして終わった非常に興味深い発表であった。

ニュージーランド国立図書館がマオリ語の資料について、書誌情報をコンピュータに入力し、目録をとり始めたのはほんの2年前であった。図書館において多様性を認め合うという

事は、運営、目録、レファレンス係、そして何よりも利用者に課題を突き付けるという事を意味する。多様性を認めていくという事は図書館に変化と適応を求めるという事になる。多様性とは、相互に違いを認め合い、その違いを喜び合うという事である。ニュージーランドではウェリントン公立図書館 (Wellington Public Library) がこうしたサービスを提供している。

150年間にわたって行われてきたマオリの人々への不当な扱いを改め、共に相互の文化を尊重し、マオリの人々の社会的地位を向上させるためにニュージーランド政府は法律を制定し、また国立図書館もマオリの人々とそうでない人々とのパートナーシップを強めるための目標を定めている。パートナーシップこそが鍵である。我々一人一人がニュージーランド国内、環太平洋諸国、アジアそして世界中の人々の多様性を理解し、受け入れ、喜び合える道を歩んでいくべきである。(3)

## 2. 多文化社会サービス

IFLA で多文化社会サービスのセクションがスタートしたのが1980年で、2000年のエルサレム大会で創設20周年を迎える。このサービスの必要性に着目したのは、移民や難民として母国語を話す社会から離れて暮らす人々が地域社会の中で一定数以上を占めるようになったカナダや北欧の図書館人達であった。

カナダとオーストラリアは多文化社会の形成を憲法でうたっており、先住民や移民、難民といったマイノリティーの人々とマジョリティーの人々との間に相互理解を深め、相互に多様性を認め合うことを原則とした政策がとられている。また、難民を多く受け入れてきた北欧の国々もこうした人々や先住民の言語や文化を尊重する政策をとっており、図書館はその重要な一端を担っている。

1986年に東京で IFLA 大会が開催された時、日本にはこうしたサービスは、多くの在日外国人が居住していたにもかかわらず、皆無であった。IFLA は大会決議として、図書館の所轄官庁である文部省に対して多文化サービスを推進するよう申し入れている。その後、日本にもわずかではあるが、在日韓国・朝鮮の人々にハングル文字資料を提供したり、ペルーの日系人にスペイン語資料を提供したりする図書館があらわれてきた。

多文化サービスの対象となるのは外国人のみではない。文化的にマイノリティーである人々、先住民族、何らかの理由で図書館の利用が困難な人々も対象としている。かなり広い概念が要求されるサービスである。

この多文化サービスのセクションは、前述したように、1980年、IFLA のワーキング・グループとしてスタートした。1983年にラウンド・テーブル (Round Table on Library Service to Ethnic and Linguistic Minorities) となり、1985年にセクションに格上げされ、現在に至っている。目的として、

- \* 言語的文化的マイノリティーに図書館の利用及び資料についての情報を提供し、こうしたサービスを立案し実行する司書を援助する。
- \* 多言語多文化サービスを推進していくための情報交換の場を提供する。
- \* 図書館の運営や人事における差別と戦い、図書館資料選択に際して人種問題を解決するよう奨

高 島 涼 子

励していく。

\* 図書館の管理や施設の一般的な運営形態をこうしたサービスに統合していくよう働きかける。

\* 大学での図書館情報学において多文化サービス研究を取り入れるよう努力する。

\* 多文化サービスに関する出版を奨励し、支援していく。

\* 多文化サービスのガイドラインを出版する。

\* この分野における国内及び国際組織と協力していく。

\* 多文化サービスに関する資料の書誌的な指導をしていく。

という9項目を掲げている。(4)

現在このセクションは多文化サービスのガイドラインの改訂版を出版しており、日本語版は1999年中に日本図書館協会から出版される予定である。このガイドライン改訂版は日本語版のほかに、ドイツ語版、ロシア語版が出版されており、今後スペイン語版の出版を予定している。

筆者はここ数年高齢者への図書館サービスについて研究を続けてきた。高齢者サービスも多文化サービスと深く関係しており、今後は常任委員会のメンバーとしての責務もあり、この分野についての研究も進めていきたいと考えている。

注

1. *Libraries and Librarianship in Thailand from Stone Inscription to Microchips*, published by IFLA '99 National Organizing Committee Bangkok, Thailand, 1999.
2. *65th IFLA Council and General Conference August 20-28, 1999 Booklet 3*. pp. 19-22
3. *Ibid.*, pp. 36-40
4. 多文化サービスについては下記の文献を参照されたい。

(1) 『多文化社会の図書館サービス カナダ・北欧の経験』深井耀子著 青木書店 1992年

(2) 深井耀子「多文化社会図書館サービス その歩みと現状」『図書館界』vol. 38, no. 5、1987年